
id外伝 ~ a miracle week of boy and girl (少年と少女の奇跡の一週間)

白紅茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンボールVivid外伝〜a miracle week
of boy and girl（少年と少女の奇跡の一週間）

【Nコード】

N1324X

【作者名】

白紅茶

【あらすじ】

次元犯罪者を追跡する高町なのはは巨大な次元の穴に呑み込まれて…。これは現在連載中のドラゴンボールVividの外伝小説です。本編より過去の話なのでなのはと悟飯は子供です。

プロローグ

「レイジングハート、追いかけて!!」

『all right!』

上空で叫ぶ少女の掛け声と共に桜色の羽が舞い落ちる、空気を突っ切って前進する彼女の瞳に写るのは一人の次元犯罪者。

身を包むフードによって体格などの特徴は掴みにくいが図体から男である事は掴める。不気味な雰囲気を取り持つ男は彼女から逃れるように空中を駆け抜けていた。

時は闇の書事件終結後、数ヶ月の時間が過ぎ去り平和な日々を送っていたなのはに時空管理局からある一つの指令が下ったのだ。その指令は何ら難しい物ではない。警察的機能を持つ時空管理局の仕事としてよくある「犯罪者逮捕」である。なのははその指令を受けて今、逃走する次元犯罪者を捕縛しようとレイジングハートと共に宙を舞っているのだ。

(早く捕まえないと、フェイトちゃん達のことも気になるし……。)

この命令を受けた者は彼女だけではない、フェイト・T・ハラオウンもまたその一人。彼女は別の次元犯罪者を追跡している。

その事がないのは不安を掻き立てて焦りを生み出している原因の一つでもあった。やがてなのはは男を路地裏にまで追い詰め、そして魔法を唱える。

「武器を納めてください……！」

『Restrict Lock。』

「この私を追い詰めるとは……正直、子供と思って油断していたよ。」

捕獲魔法レストリクトロック、その魔法を唱えた直後に桜色に輝くリング状の拘束具が相手の身動きを封じようと出現する。

だが反して男は抵抗する事もなくなのはの拘束魔法によって簡単に封じられてしまう、諦めが付いたような態度を取る男の顔色はなのはからは窺えない。

取り乱す事も無ければ抵抗する事も無い、ただ沈黙が場を支配する。同時に男の崩れない冷静さを目の当たりにして逆になのは自身が男に緊張感と焦りを生じさせていた。

「……確かにこのままだと捕まってしまうな。だから、これの力を使わせてもらう。」

「え……？………ロストロギア!？」

辛うじて動ける右手から取り出したのは蒼色に煌く宝石、なのはにとって最も見慣れた宝石の一種。口角を吊り上げ不気味に笑う。

「そつだ、この力さえあればこの世の全てを自由自在に操れる。」

男が発する言葉の意味を知るなのは表情は一変、彼女の足元に魔方陣が浮上すると同時に　突拍子も無く次元に歪みは起きた。それはハッキリと視界に映る形で現れ、男の持つロストロギアを中心にして渦巻く漆黒の闇が出現したのだ。

闇は空間を蝕むように膨張していき、上空から照らす月光を反射させる事も無く飲み込んでいく。戸惑いの色を浮かべる男は栗を開いた。

「バカなっ!?!　空間に穴があいただと…!」

「ロストロギアが…どうなってるの…!…きゃっ!…!」

空間の穴である漆黒の闇は周辺に存在するチラシやゴミ等を見境なく吸収していく、その途方もない吸収力によってなのはは一気にバランスを崩して尻餅を付いてしまう。

咄嗟に彼女の視界に入り込んだ建物を支える為にあるであろう柱に、両手だけがみ付いて抵抗を試みるも空間を蝕む闇はその吸収力の強さは増していく。

「…ぐっ!…!」

「っ、っ…!…!きゃあああ!…!」

遂に男は漆黒の闇へと吸い込まれ、柱にしがみ付いていたのはも限界を感じ柱に伸ばす手を放してしまう。

悲鳴を上げながらレイジングハートと共に暗闇だけが広がる一面の闇へと吸い込まれ、二人を吸い込んだ空間の穴は何事もなかったかのように消滅する。

再び沈黙が流れる路地裏は闇が吸収しようとしたチラシが行方を失う宙を散乱し、何か起きたという痕跡を残す奇妙な風景へと成り代わっていたのだった。

プロローグ（後書き）

悟飯「更新が遅くなってすみません。外伝の方は本編の合間に挟んで更新していきます。」

なのは「こちらのお話は、今連載しているドラゴンボールVivi dのわたしこと、高町なのはと孫悟飯くんとのお会いの物語です！本編で謎だったことも外伝の方で明かされますのでお見逃しなく！」

悟飯「本編の方もよろしくお願いします！」

第1話 不屈の魔法少女と心優しきサイヤ人の少年

「お母さん、お爺ちゃん、いってきますす！」

「お昼までには帰ってくるだよー！ーっ！！」

世界の命運を懸けたセルゲームが終了してから一年が経とうとしていた。

あれから一度だけ地球の存続を廻る大きな闘いがあったが、孫悟飯を始めとしたZ戦士の活躍によって再び平和を取り戻したのだ。

「もうすぐボクがお兄ちゃんか…。」

舞空術で飛行してパオズ山の奥へと向かいながら、悟飯は少し前の出来事を思い返す。

二度目の闘い…ボージャック一味との死闘を終えて間もない頃、母親のチチが妊娠したのだ。

それはセルゲームで命を落とした父親の孫悟空が残した形見。弟ができるのは悟飯にとって嬉しいことなのだが、内心では複雑な気持ちもあつた。

「見えてきた……ん？ 空に穴があいてる…。」

上流の川が見えて降下しようとした直前、少し離れた前方の空に漆黒の空洞が映る。

穴の正体が気になった悟飯は再び上昇して禍々しい穴の元へと向かうのだった。

「んう……あれ？　ここ何処なの？」

次元の穴の中へと吸い込まれたのはが目を覚ますと、全体が青空
いっぱい広がっていた。

吹き抜ける風が肌に触れて寒さを感じる。そこでようやく自分が仰
向けの体制のまま落下していることに気づく。

「ふえええええええつ！！？　レ、レイジングハート！」

更に変身も解除されて防護服ではなく私服姿。慌てて自身のデバイ
スである赤い宝玉を手にとって掲げようとするが。

「……えつ？　嘘っ！？　レイジングハートがない！」

首元に掛けてある筈の赤い宝玉がなく、混乱に陥る。その状況の中、
無情にも落下の速度は止まらない。

このまま地面に激突すれば間違いなく死に至るだろう。万が一生き
延びられても重傷を負う事は明白。

「きゃあああああああああああつっ！！！」

(助けて……おとーさん、おかーさん……ユーノくん、フェイトちゃん
……)。

家族や友人に助けを求めるが此処は異世界。なのは自身も来ることはない。薄々と感じている。それでも、脳裏には彼女の大切な人達の姿が浮かびあがり涙を流す。後は激突する瞬間を待つしかなかった。

が、しかし何時まで待ってもその瞬間は訪れない。もうとつくに激突しても不思議ではないのだ。ふと背中を何かに支えられている感覚を覚える。疑問に感じて閉じていた瞼をゆつくりと開くと。

「もう大丈夫だよ。」

「ふえ？……うん！」

視線の先にはあどけない笑みを浮かべた少年の姿があった。その笑みを見て安堵したのか彼女も満面の笑みを少年に返す。これが不屈の心を持つ魔法少女、“高町なのは”と心優しきサイヤ人の少年“孫悟飯”の出会いであり、物語の始まりである。

第1話 不屈の魔法少女と心優しきサイヤ人の少年（後書き）

初めまして！黒紅茶様の代理執筆をすることになりました白紅茶です。

黒紅茶様のように文章は上手くありませんが、構想から雰囲気を残せるように頑張りますのでどうかよろしく願います。また、この話は黒紅茶様が執筆している本編の複線にも繋がっています。

第2話 山奥の中で

なのはを助けた悟飯は彼女を横抱きで抱えて上流の川がある山奥を
目指して飛行する。

結局、空の空洞は近づいた直後にあっという間に閉じてしまい正体
がわからずじまいとなった。

「あ、あの…助けてくれてありがとう。」

「どういたしまして。あ、キミを村に送る前にちょっとだけいいか
な？」

「え？ う、うん。」

悟飯は上空から落下したなのはを近くの村に住む少女だと思ってお
り、なのはも反射的にそう答えてしまったのだ。

「ありがとう。すぐに終わるから。」

「…… ふえええええっ!?!」

地上へ降下すると悟飯はなのはを解放し、何の躊躇もなく彼女の目
の前で自分の道着を脱ぎだす。
それを見たなのはは顔を真っ赤に染め慌てて背を向ける。その間も
布が擦れる音が聞こえていた。

「 よしっ!」

道着を脱ぎ終えてショートパンツ一枚だけ穿いた姿になると、道着

を折りたたんでから川へと歩いていく。
なのはも落ち着いたのか少し離れた場所から鍛え抜かれた肉体を持つ少年の背中を心配そうに見守っている。

（大丈夫かなあ…）

これから悟飯が飛び込もうとする上流の川は流れが速く、一歩間違えればその先の滝壺に落とされてしまうのだ。
だからこそ不安が集い、自分を助けてくれた黒髪の少年を止めようと声を掛けようとするが、一足遅く少年は川の中へと飛び込んでしまった。

「これからどうしよう…。」

数分経過しても水面に顔を出さない少年を心配しながらも、なのははこれからの事について考えていた。
此処が何処なのか、一緒に次元の穴に吸い込まれた筈の男の行方、紛失してしまった自分のデバイス…。
何度か念話を送っても誰一人として？がらないことからこの世界は自分の知らない異世界だと認識できる。

「そういえば、あの男の子…空を飛んでた。魔力は感じられなかったけど…。」

先程少年に助けられた出来事を思い出す。彼は間違いなく空を飛ん

でいたのだが、魔力が感じられないことが疑問に残った。
もしかしたら少年は普通の人間ではないのかもしれないと考えていると、突然ザバァン！と水が跳ねる音が聞こえてすぐになのはは走り出す。

「えっ!?!」

「ははっ、おっきいのが捕れたーっ!」

なのはの向かった方角は上流の川の先にある滝の真上で、下を見下ろせば全長3メートルはあるう巨大な魚を少年が両手で持ち上げていたのだった。

第3話 いなくなった少女

「こ、これ本当にお魚なの？」

「そうだよ。けど、今回はイキがいいなあ。」

陸に出た後でも未だに元気よく跳ねる魚に対して少年と少女は各々の反応を見せる。

なのは今まで見た事のない魚の大きさに驚き、悟飯は普段よりも粹のよい魚に喜んでいた。

「にははは…と、ところでそろそろ服を着て欲しいんだけど。」

「え？ なんで？」

「な、なんでって……。」

なのはの視線は同年代とは思えない程の筋肉がついた少年の身体に向けられていた。

悟飯との距離は近く、なのはの頬は恥ずかしさからかほんのりと赤く染まっている。

しかし、悟飯はそんななのはの心中などわからずに首を傾げて問いかける始末。

まさか問いかけられるとは思わなかった少女は返答に困り更に頬が赤みがかかっていく。

「とにかく着替えてっ！ わ、わたし向こうで待ってるから！」

「う…うん。」

遂に耐えられなくなったのは折り畳まれた道着を悟飯に差し出して森の奥へと駆け出していくのだった。

「ううゝなんであんなに平然としてられるのかなあ。」

初めて会った女性に平然と素肌を晒している少年はなのにとっては衝撃的だった。

いくら子供でも同年代の相手がいれば多少の羞恥心くらいはあってもいい筈なのだが彼にはそれがまったく感じられない。

実際、悟飯は父親の影響を受けており自分に関してはほぼ無関心で、逆に母親の教育で他人や年上に対する気遣いや礼儀などは持ち合わせている。

「あ、そういえばまだ名前を聞いてなかった。」

少年の名前を聞いていなかった事を思い出す。流石に助けてもらった相手の名前を知らないのは失礼だと思ったのだ。少年の着替えが終わったら尋ねようと決めて、目に入った近くの木に寄り掛かろうとするが。

「ぐははー！ 久しぶりの女の肉だーっ！！」

「きゃあっ！？」

背後から現れた巨大な黒い影に覆われた後、その場から姿を消してしまった。

「あれ？ あの子は…？」

着替えが終わって少女の待つ場所に向かった悟飯だが、そこに少女の姿は見当たらない。

（二つの気が少しずつここから離れていってる…。一つはあの子の気だ。）

悟飯が気を探るとすぐに少女の気を察知できた。同時にもう一つ別の気を察知する。

もう一つの気の正体については知らず、何故その気が少女と一緒にいるのかもわからない。

不思議そうに考えていると木陰の付近に大きな二つの足跡があることに気づく。

「これって……追いかけるべきや！」

その足跡の正体がわかると、地面に放置してあった巨大な魚を紐で背中に括り付ける。

そして舞空術で身体を垂直に上昇させていき、二つの気の元へと向

かじりであった

。

第4話 孫悟飯と高町なのは

パオズ山の遙か先にある火山地帯。その山の一角に丸い巣が作られていた。

巣の中には様々な食料やガラクタが集められ、少女もその巣の中に放り込まれる。

状況を掴めないのはが周囲を見渡すと空中を迂回する生物の姿を捉えるが。

「がははー！ 今日はずいてるぜ。」

「きよ、恐竜！？」

「肉も手に入って今夜はご馳走だーっ！！！」

「しかも喋ってる…っ！？」

なのはは目の前の光景に二つの意味で驚愕していた。

一つは学校の教科書に何億年も前に絶滅したと記された筈の恐竜が存在する事。

そしてもう一つが、その恐竜が人間の言葉を普通に使っている事だ。しかし、驚きは残っているものの少しずつだが今の状況を受け入れていく。

前者の場合、異世界という点を考えればそれほど不思議な事ではない。

事実、恐竜とは違うが人外と呼ばれる生物と相對した経験が何度かあった。

後者についても少女が魔法少女になるきっかけを作った魔導師ユー・スクライア。

なのはの親友であるフェイトの使い魔のアルフ、はやての守護騎士のザフィーラ…。

彼等も人外でありながら人の言葉を話せるのだ。ユーノの場合は変身魔法を使用してるだけだが。

「ぐははは！ プリプリとして美味そうだな。」

「いやあ……。」

「夜まで我慢できないな。少しだけ味見するか。」

(怖いよ……。)

なのはに恐竜と呼ばれた青色のプテラノドンが己の舌で少女の顔を嘗め回す。

少女は嫌がつて必死に抵抗するも現状ではデバイスがなく魔法も使えない状態。

普通の少女と変わらない今のなのはではこの状況をどうする事もできなかつた。

そして我慢できなくなったプテラノドンが大きく口を開いた瞬間。

「その子を放せ！」

「誰だっ!？」

「あ…っ!」

突き刺さるような怒声が響き渡る。その声に反応してその場にいる全員が振り向く。

その場に現れたのは全身紫色の道着と青い帯を身に纏った黒髪の少年、孫悟飯だった。

「なんだ、ただのガキか。ん？」

現れたのが子供だと確認したプテラノドンは安堵するがふと少年の背中に視線が向く。

少年の背中には巨大な魚が紐で括り付けられているのだ。魚は未だに抵抗している。

紐に括り付けられても元気な魚の様子を見てプテラノドンは思わず涎を垂らす。

「いいだろう、そいつを解放してやる。ただし、その魚と交換だ!」

「……わかった。」

条件は魚と少女の交換。すぐに悟飯は承諾し括り付けた紐を解き魚を両手で抱え持つ。

「オレの所まで持ってこい。おかしな真似をしたらこのガキの命はないぞ。」

「きゃっ!」

「やめろっ! 言う通りにするから...。」

プテラノドンの片手に胴体を掴まれては強力な手の圧力でなのはは苦痛を歪ませた。

その様子を見て慌てた悟飯は焦りを見せながらもプテラノドンの元へと歩き続ける。

（バカなヤツめ。ギリギリまで近づいた瞬間、八つ裂きにしてやる。）

徐々に接近する悟飯を見据えながら隙を突いて少年を殺し魚を奪う計画を企む。

だが、なのははプテラノドンがほくそ笑む姿を目撃し何か裏がある事に気づく。

「ダメッ! 来ちゃダメッ!」

「ちっ...このガキッ!」

すぐに悟飯に向かって叫ぶなのはの顔にプテラノドンは片手の爪を立てて斬り掛かる。

「なにっ!?!」

「え.....。」

が、その攻撃は顔に届くギリギリの所で止まっていた。
飯の手によって。

悟

「だああっ!」

「ぐええっ!?!」

そして悟飯の右拳がプテラノドンの腹部に伸びるとドガッ!と鈍い音が響き渡る。
呻き声をあげるとそのままプテラノドンは仰向けに倒れて気絶してしまうのだった。

「また…助けられちゃったね。ありがとう。」

「お礼はいいよ、ボクが恐竜がいることを伝えなかったのが原因だから。怖い目にあわせてごめんね。」

「ううん、わたしは大丈夫。……ところで名前を聞いてもいいかな…?」

怖い目に合せて申し訳なさを感じる少年になのは近づいて満面の

笑みを浮かべる。

それから少し間を置いて、助けられた時からずっと気になってた少年の名前を尋ねた。

「うん。ボクは悟飯、孫悟飯だよ。」

「悟飯くんだね。わたしは高町なのは。なのはって呼んで。」

「わかった。よろしくね、なのはちゃん。」

悟飯が笑顔で名前を名乗るとすぐになのはも笑顔で返す。

「さてと…そろそろなのはちゃんを家に送らなきゃね。」

「あ、それなんだけど……。」

「筋斗雲……っ！！！」

「えっ?」

悟飯の発言に口を挟もうとしたのはだが、突然空に向けて大声で叫ぶ悟飯に驚く。

その後、悟飯の声に反応して物凄い速さで綿菓子のような黄色い雲が向かってきた。

「これって…雲?」

「よっど。ほら、なのはちゃん。」

「ぎゃっ……。」「

なのは不思議そうに雲を眺めていたが、それに飛び乗った悟飯の手に引つ張られて自らも雲の上へと乗る。

「落ちないようにしっかりと掴まってて。」

「わ、わかった。」

二人を乗せた筋斗雲はゆっくりと火山地帯から離れていきパオズ山へと向かう。

（あつたかくて気持ちいいな…なんだか眠くなってきた……。）

太陽に照らし出され筋斗雲の乗り心地に満足するのは徐々に眠気に誘われる。

やがてパオズ山が見えてきた所で悟飯の肩に寄り掛かる形で眠ってしまったのだ。

「なのはちゃん？」

「すー……。」

片手に魚の尾を持って前を見据えていた悟飯は肩に掛かる違和感を感じて振り向く。

其処には自分の肩に寄り掛かって眠るなのはの姿が。呼びかけるが起きる気配はない。

（困ったな…なのはちゃんが起きてくれないと家に送れないよ……。かと言って無理やり起こすのも可哀想だし……。どうしよう……。）

予定ではこのままなのはが住む村まで送ろうと思っていたのだが、
当の本人が熟睡してる為それができない。

「うーん、とりあえず家に帰ろうかな。お母さん達も心配してるだ
ろうし。」

悩んだ末、彼女が起きなければ村に送るのが不可能な為一度家に戻
ることにしたのだ。

なのはとの出会いから大分時間が経っており、今頃チチ達は心配し
てると予想して。

家に到着するまでの間、悟飯は熟睡するなはずっと肩を貸して
いたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1324x/>

ドラゴンボールViVid外伝～a miracle week of boy and girl（少年と少女の奇跡）

2011年11月22日04時02分発行